

Title	『山海經』研究上の一課題
Sub Title	A theme in the "Study of Shan-hai-Ching" (山海經)
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1985
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.1 (1985. 8) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19850800-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山海經』研究上の一課題

伊藤清司

劉秀が『山海經』の叙録に、この書の校訂を行なつた旨を述べたあと、『山海經』の成立について、つぎのように記述している。

宝奇物、異方ノ生ズル所、水土・草木・禽獸・昆蟲・麟鳳ノ止ル所、禎祥ノ隱ルル所、及ビ四海ノ外、絶域ノ国、殊類ノ人ヲ紀ス。

このようにして、

禹ハ九州ヲ別チ、土ニ任セテ貢ヲ作り、益等ハ物ノ善惡ヲ類チ『山海經』ヲ著ス。

といい、このことは、

皆聖賢ノ遺事、古文ノ著明ナル者ナリ。其ノ事質明ニシテ、信有リ。

と確言している。

『山海經』の成立に関するこの叙録は、当代隨一の碩学ヲ定ム。益ト伯禽トハ禽獸ヲ驅リ、山川ニ命ジ、草木ヲ類チ、水土ヲ別ツヲ主ル。四嶽ハ之ヲ佐ケ、以テ四方ヲ周リ、人跡ノ希ニ至ル所ニ逮ビ、舟輿ノ罕ニ到ル所ニ及び、内ハ五方ノ山ヲ別チ、外ハ八方ノ海ヲ分チ、其ノ珍

で権威を持ち続けてきた。⁽¹⁾

しかし、今日、禹・益の著録とする劉説は附会の説とみるのがすでに常識となつていて、『山海經』の成立は唐虞・夏初はいうまでもなく、その時期は遙かに下り、しかもこの書が一時期、一人の筆、一定の体裁によつて編録されたものでないことは、近年の研究者のほぼ一致した見解といつて誤りない。⁽²⁾

それではこの書が一時代、一人の手に成つたものではないとする根拠は何か。以下、その主要な事由を挙げれば、おおむねつぎの諸点に要約される。

- 1 劉秀校訂本並びに古文献に記されている『山海經』と現行本との間に認められる卷数や篇目数の不一致の存在

- 2 現行本の各巻、各篇の間に認められる記述体裁上の不一致の存在

- 3 同じく各巻、各篇に亘る重複記事の存在
- 4 同じく記述内容の時代的矛盾等の存在

以上の各点につき、順を追つて説明する。

一

この文に籠められた司馬遷の『山海經』に対する評価は現行本『山海經』の内容的特質と大きな齟齬のないことなどの理由から、司馬遷が披見したその『山海經』が現行本と全く別の書であるとか、あるいは著しく内容を異にする書であった可能性は殆ど考えられない。しかし、『史記』のこの言及が余りに簡単であるため、全く同一の書であったということもまた断定はできない。

ところで、班固の『漢書』芸文志に、

山海經十三篇

とあり、それは劉秀の校訂本の十八篇とその篇目の数が異なつてゐる。つまり、ほぼ同時代に行われていた『山海經』に篇目数の相違するものが存在していただらしいことが窺われる。しかも班固のいう十三篇というその『山海經』の数目は、他ならぬ朝廷の書庫に収蔵する秘本の整理に従事した劉向・劉秀父子の在庫目録『七略別録』のそれを転載したものとされてゐるのである。ところが、劉秀が父の遺業

を継いで図書の整理を行ない、『山海經』を校訂して定本を作り、解題を付して皇帝に奉ったその経緯を、彼は侍中奉車都尉光祿大夫臣秀、秘書少校スルヲ領シテ言ス。校秘書太常属臣望校スル所ノ『山海經』凡テ三十二篇、今定メテ一十八篇ト為シ、已ニ定メタリ。

と叙述している。これによれば、漢室には校秘書太常属の臣望が整理した三十二篇の『山海經』⁽³⁾が存在していたこと、これを劉向が整理した際、十三篇としたこと⁽⁴⁾、更にその後、劉秀が校訂を加えて十八篇の定本を作ったことが理解される。そうであるならば、望校するところの三十二篇のそれは暫く措くとして、劉向・劉秀父子の関与した『山海經』に十三篇のものと十八篇のそれが存在したことになり、この両者の関係が問題となってくる。ただし、この両者が内容の異なる別種の『山海經』であったとは殆ど考え難いから、問題は篇目の立て方、分巻の仕方から来る数字上だけの違いであるのか、それとも、その数字の差は内容に加減の相違があつたことを意味するかということになつてこよう。この点については、從来種々の臆説が輩出している。たとえば、清の『四庫全書総目提要』はこの数字上の不一致を解しかねるし、『山海經』に付記されている劉秀の叙述はすべて後世の偽託であろうといい、また、顧実は『漢書芸文志講疏』の中で、『七略』には本来、「山海經十八篇」

とあつたに違いない。その中から「大荒四經」四篇と卷末の「海内經」一篇の計五篇を削除して、十三篇として、『漢書』芸文志に書きえたのであろうという。これらの他、いくつかの試論が提出されているが、いずれも臆測の域を出ていない。

この篇目上の問題について、早くに小川琢治が注目すべき解釈を試みていることは周知のとおりである。⁽⁵⁾ 彼の見解は現行の『山海經』中、はじめの五藏山經が最古の篇であろうという仮説を前提にしたものであるが、南山經三篇、西山經四篇、北山經三篇、東山經四篇、それに中山經十二篇、合計二十六篇とあるものを、はじめは二篇ずつ併せて十三篇と算えていた。これをそのヴァオリュウムの多少に拘らず、南・西・北・東・中山經の五篇に改め、これに海外・海内の各南・西・北・東四經をそれぞれ四篇と算え、五藏山經の五篇に加えて十三篇とし、篇目数を改めずに、内容を追加した。これが『七略』のいう「山海經十三篇」であつたと見做している。それでは十八巻という数目はどのようにして成立したか。この点については、劉秀が校訂を重ねた末、さらにこれに大荒東・南・西・北の各經と海内經一篇の計五篇を新たに加えて、十八篇としたということも一応考えられないこともないが、しかし、これでは解釈上困難に逢着する。それは劉秀らの跋文が現行本の第九と

第十三（海内・海外各東經）の篇末にのみ付記されていて、大荒四經と海内經の末尾にないという点である。これについてはやがて再言する。さて、小川は『隋書』經籍志に

山海經二十三篇 郭璞注

とある『山海經』は、その内容が現行本のそれと同一物であるという前提に立ち、その篇目が海外・海内・大荒の各經が四、卷末の海内經が一、以上の合計が十三篇、従って五藏山經を十篇と算えたであろうと推定した。この五藏山經を十篇に分つたとする可能性は宋の尤袤本『山海經』の跋語から考えられると小川はいう。つまり、張金吾の『愛日精廬藏書續志』卷三小説類に所載の、尤袤の跋語が道藏本『山海經』の篇目に触れて、五藏山經は十卷、その内訳は經文の長さを基準にして分巻し、「南山・東山各自為一巻、西山・北山各分為上・下両巻、中山為上・中・下三巻、別以中山東北為一巻」であるとしているのである。そしてこの道藏本は宋以前より伝えられたものであるとされるから、これは劉秀校訂本の面目を伝えていた可能性があると

いう点が、小川説の根拠となつたのである。要するに、小川の解釈は『山海經』の篇や巻の立て方は便宜上のもので、『七略』の十三篇本と劉秀校訂の十八篇本とは、その内容上に相違はなかつたと見ていい。従って、現行の大荒四經と海内經一篇は後世の追加であり、その追加の折に、五藏

山經十篇を南・西・北・東及び中山經の五篇に篇目を変えをすることによつて、劉秀以来の合計十八篇の篇目数だけはそのまま踏襲したのであろうと主張した。

小川説と殆ど逆の成立順序を主張する者に高馬三良がいる。高馬は小川とは反対に、五藏山經は海外四經等に比較してより遅れて成立したものと見て、海外四經・海内四經・大荒四經・海内一經の計十三篇が『漢書』芸文志にいう「山海經十三篇」であろうという。(ただし、海内東經の中に含まれている水志・禹本紀系統と思われる部分の記述を除くという) これに五藏山經五篇がのちに追加されて、劉秀の校訂本十八篇が成立したと解釈している。⁽⁶⁾

顧頽剛は五藏山經の成立が他の海内・海外・大荒の諸經よりおくれると見る点では高馬説と同様である。しかし、『山海經』として編集された順序については、小川説とほぼ同様で、五藏山經と海外・海内各四經がまづまとめられ、大荒經以下はあとから付録されたものであろうと理解している。⁽⁷⁾

袁珂説もある意味では高馬説に近い。袁は最古の篇は大荒經四篇と海内經一篇で、戦国前期もしくは中期以前に成立し、五藏山經と海外經四篇はこれについて戦国中期以後の作品とし、海内經四篇は最も新しく、漢代初期の作品であるとしている。ただし、劉秀による校訂は五藏山經十篇、

海外・海内經各四篇、計十八篇であり、大荒經以下の五篇が『山海經』に加えられたのは劉秀の校訂以後で、おそらくは東晉の郭璞が注を加えた折のことであり、その際、五藏山經を五篇とし、十八篇の数に合わせたものであろうと、袁珂は解している。⁽⁸⁾

以上の袁説にやや近いのが蒙文通の説である。ただし、海外經四篇は五藏山經等より古く、戰國中期の作品、大荒經以下五篇は西周前期の作品としている。⁽⁹⁾同種の説は他にもあるが、しかし、陸侃如、何觀洲等、近時の学者の多くは大荒經以下五篇は五藏山經等に比較して新しく、劉秀の校訂⁽¹⁰⁾以後の追加としている。前野直彬も小川説に同調している。

高馬説に較べて小川等の説の長所は、さきに触れたように、現行本の第九篇と第十三篇、つまり、海外東經と海内東經の末尾に、ともに

建平元年四月丙戌、待詔太常屬臣望校治、侍中光祿勲臣龔、侍中奉車都尉光祿大夫秀、領主省

という、建平元年（紀元前六年）に校訂を終了した旨の跋文が付せられており、これに対して、大荒北經および海內經、つまり、第十七篇と第十八篇の末尾に、同種の跋文が見られない点である。この事実は、劉秀らの校訂が五藏山經と海外・海内各四經の計十三篇を対象としていたこと、

それ以下はその後の増加であることを示唆するのである。なお、建平元年の跋文に劉秀と名を連ねている主なる校訂者の望と龔はそれぞれ丁望・王龔であろうといわれている（郝懿行『山海經箋疏』）が、そのうちの丁望は劉向に先立つて「山海經三十二篇」を校べた「校秘書太常屬臣望」その人であろうと推測される。建平元年時の待詔太常屬の肩書は、丁望がこの間に職務の移動のあつたことを物語るものであろう。劉秀はこの校訂の経験をもつ丁望等と協力して定本の校訂に従事したものと思われる。

郭璞の「山海經目録總十八卷」の海内經の注文によれば此海内經及大荒經皆進在外、今校

という。明覆宋本にはこの「進在外」が「逸在外」とあるが、小川はこれは大荒東經以下の五篇が劉秀らの校訂の境外にあつたもので、のちに追加されたことを意味していると説いて、自説を補強している。⁽¹¹⁾

海内四經までを劉秀らの校訂とする解釈は大荒四經が東經から始まって北經で終っているのに對し、五藏山經・海外・海内各四經がいずれも南經から始まって東經で終る（ただし、五藏山經はそのあとに中山經が続く）その体裁が一致しており、高馬説に比較し合理性に富んでいる。ただし、五藏山經に海外四經・海内四經を加えて十八篇の定本としたとするならば、劉秀らの跋文が海外四經・海内四經

の各末尾と同様に、五藏山經の末尾にも付記されるべきであるのに拘らず、肝心のそこには同種の跋文を欠いているのは、一見不可解といわなければならぬ。しかし、この点については後述するように、中山經の末尾には、

禹曰、天下名山云々

という百四十四字を算える長文の総括の跋語が付記されている。この文が誰人の手になつたものであるかは詳かでないが、おそらくこれは『山海經』を禹・益の編著とする古伝の根拠とされるもの、乃至は古傳を信じた者が付記したものであろう。いずれにしろ、これは劉秀らによる建平初年の校訂以前から存在し、それが有るために、彼らは五藏山經末尾に改めて跋文を加えることをしなかつたのではないかと考えられる。⁽¹²⁾

このような解釈は『山海經』ははじめ五藏山經から成っていたという仮説に整合する。つまり、『山海經』の原初は海外・海内四經をも伴わない所謂『山經』であつた可能性がある。⁽¹³⁾ この問題に関し、陸侃如は別の観点から、司馬遷の披見した『山海經』はこのような『山經』ではなかつたかという推定をしている。陸侃如は王充の『論衡』談天篇に、『史記』大宛伝の

故ニ九州山川ヲ言ウハ尚書之ニ近シ。禹本紀・山海經ノ有スル所ノ怪物ニ至リテハ、余敢エテ言ワザルナリ。

の贊文を引いて、

……禹本紀・山經有スル所ノ怪物云々
と『山海經』を『山經』と作つていることを指摘している。そしてさらに『漢書』張騫傳贊にも同様に、

九州山川ヲ言ウハ尚書之ニ近シ。禹本紀・山經ノ有スル

所……

とあり、また左思『吳都賦』に見える

名ハ山經ニ載り、形ハ夏鼎ニ鏤ル。

など、約二十に及ぶ山經の文字を古典籍の中から拾い出し、『山經』と呼ばれた書が、海外・海内以下の諸篇と関わりなく、独立して存在していたであろうと主張している。そして現行『史記』大宛傳贊に、『山海經』とある点については、

我只希望説明史記原文並無『海』字，乃後代妄人所増と、後世、『山海經』成立の経緯に無智な何者かによつて、海の字が加筆されたと推測し、さらに海外・海内各四經は『淮南子』の成立以後の成書とみて、これらが

至劉歆始附於山篇的後而合称『山海經』

としている。陸侃如説の拠り所とされた上記以下の資料がすべて後漢以降の文献であること、例示された一十余の『山經』という文字の中には、『山海經』の中の五藏山經のみを特に対象として文字にされているものがあつたかも知

れないと、それに肝心の『史記』大宛伝贊文の『山海經』の海字を、後世の附加とする明証のことなど、陸説にとつていずれも決定的根拠であるとは断定し難い。しかし、たとえば、『論衡』談天篇に、

禹ノ山經・淮南ノ地形ヲ按ジ、以テ鄒子ノ書ヲ察スルニ
虚妄ノ言ナリ。

とあるように、禹（または禹・益）が著作した書が山經であるとする考え方があつたらしいこと⁽¹⁵⁾、そしてこのことが五藏山經の末尾の「禹曰」の文と対応していることは、『山海經』（正しくは「山經」）の原著者が禹か否かは論外としても、『山經』がかつて海外經以下とは個別に存在していた可能性を全く否定することができないと思われる。

ただし、仮に司馬遷が披見したという『山海經』が現行の五藏山經、乃至ほぼこれに近い『山經』であったとした場合、それに對して彼がもらした「有スル所ノ怪物ニ至リテハ、余ハ敢エテ言ワザルナリ」という評価が果して相応しいかという疑惑が生じないわけではない。というのは、海外四經以降の諸篇には怪を語っている文が極めて多いからである。しかし、五藏山經の文中にも怪物が全く登場しないわけではない。従つて、司馬遷の贊文に認められる内容批判が、現行本乃至海内外四經までを含んだ『山海經』を対象としたものであつたにしろ、『山經』のみを対象とした文

であつたにしろ、必しもそれぞれの内容と齟齬のある評価であるとはいえないものがある。「禹本紀」が現存しているため、その内容は知るすべもなく、従つて、それとの比較も不可能であるが、この点は今後、五藏山經の内容を具体的に検証することによつて、明らかにするほかはないであろう。

つぎに第2の各篇間に記述体裁上の不一致が隨所に認められ、この点が『山海經』が一時期に成立したものでないことを窺わせる点について要約する。

まず、五藏山經について見ると、その記述体裁はほぼ均質性をもつてゐる。たとえば、

又北百里ヲ繡山ト曰ウ。其ノ上ニ玉・青碧有り。其ノ木ハ柂多ク、其ノ草ハ芍藥・芎芻多シ。洧水ハ焉ヨリ出デテ東流シ、河ニ注グ。其ノ中ニ鱣・鼈有リ。（北山經次三）

のようすに、基準とする山からの位置関係（方位・距離）を示して山名を誌し、その山より源を発する川名とその流入の方位を記したうえ、その山川に生棲し、またはそこに繁茂し産出する動・植物、鉱石類の名を列記するという定形をほぼ共通にもつてゐる。ただし、南山經・北山經は三つ的小篇に細分されているのに對し、西山經・東山經は四小

篇に、中山經は十二小篇に分割されており、しかも計二十
六の各小篇に長短の差異があり、記述内容にも若干の相違
がある。この点に関しては後述するが、それにも拘らず、
全般的には規格をもち、その点で山岳をめぐる地理誌的面
目を保持しており、海外經以下とは著しい体裁上の相違を
示している。

海外四經・海内四經は五藏山經の記載した空間の周縁世
界をその対象としている。それらは主として異族の住む中

国外の世界として記述され、国名、時にはそこに住む異形
の人々や異獸珍鳥類の説明に当たられている。たとえば、
つきのとおりである。

讙頭國、其ノ南ニ在リ、其ノ人ト為リハ人面・翼有り、
鳥喙ニテ方ニ魚ヲ捕ウ。

(海外南經)

林氏國ニ珍獸有リ、大キサハ虎ノ若シ。五采畢ク具ワリ、
尾ハ身ヨリ長シ。名ヅケテ驕吾ト曰ウ。之ニ乗レバ日ニ
千里ヲ行ク。

(海內北經)

ただし、このような異國・異境の民族誌的記載と並んで、
所謂神話伝説的記述も少なくない。たとえば、

共工ノ臣ヲ相柳氏ト曰ウ。九首ニシテ以テ九山ニ食ウ。
相柳ノ抵ル所、厥ラレテ沢谿ト為ル。禹、相柳ヲ殺ス
ニ、其ノ血腥ク、以テ五穀ノ種ヲ樹ウ可カラズ。禹ハ之
ヲ厥ルニ三刃ニシテ三タビ沮ス。乃チ以テ衆帝ノ台ト為

ス。

(海外北經)

舜ノ妻登比氏ハ宵明・燭光ヲ生ミ、河ノ大沢ニ処ラシ
ム。二女ノ靈ハ能ク此ノ所ノ方百里ヲ照ラス。一ニ曰ク、
登比氏ト。

(海內北經)

はその例である。しかし、これに留らず、五藏山經に見た
地理誌的記録をも雜えていた。たとえば、

陽汙ノ山、河ハ其ノ中ヨリ出ヅ。凌門ノ山、河ハ其ノ中
ヨリ出ヅ。

(海內北經)

もその一例であるが、殊に海内東經には、

洛水ハ洛西山ヨリ出デ、東北シテ河ニ注グ。成皋ノ西ニ
入ル。汾水ハ上麓ノ北ヨリ出デテ西南シテ河ニ注グ。皮
氏ノ南ニ入ル。

のように、河川の水源とその流入に関する記載が過半を占
め、ために『水經』の一部と目された所以であるが、しか
もそれらの河川が地理的には五藏山經のそれらと重複する
ものがあるなど、その内容に整一性を欠いている。⁽¹⁶⁾加えて、
内容上のみならず、記載上の体裁にも均一性がない。海内
四經では南經の東南陬より西へ向って記述が開始され、つ
いで西經は西南陬より北へ、北經は西北陬より東へ、そし
て東經は東北陬より南へと時計の針回りの順序で進められ
ている。これに対し、海外四經も南經から西經への配列を
とりながらも、西南陬より始めて東南陬、ついで西南陬よ

り西北陬、ついで東北陬より説き起して西北の陬へ、最後に東南陬より東北陬という順序で記述が進められており、統一性を欠いている。

大荒四経については既述のとおり、東経より始まり北経で終る⁽¹⁷⁾編成をとり、その点で五藏山経・海外・海内四経と相違する。内容的には主として神話的世界が描かれており、海外・海内四経のそれと通じるものが多くある。

最後の海内経も内容的には大荒四経とほぼ類似する。ただし、諸伝承が一篇の中に雜然と羅列されている。方位の別なく、その順序も特に一貫性をもたない。

以上のような各篇の体裁上・記載上の不統一は五藏山経・海外四経・海内四経・大荒四経および海内経の各経間に認められるのであるが、それのみならず、たとえば、五藏山経五篇そのものの中においても、また同様なことが指摘できる。その一例を示そう。

五藏山経の各篇には、特定の怪異の出現をもつて吉凶の予兆とする記事が多出している。

鮮山……鳴蛇多シ。其ノ状ハ蛇ノ如クニシテ四翼、其ノ音ハ磬ノ如シ。見ルレバ則チ其ノ邑ニ大旱アリ。

(中山經次二)

南山經(3)
中山經(3)⁽²⁰⁾

というのがその例であるが、それら関係記事中に、吉兆・凶兆の及ぶ範囲に広狭があり、それを示す語として、天下

・国・郡・県・邑の五種類が認められる。

ところで、これらの用語の使用例を五藏山経の各篇について具体的に検討してみると、とくに南山経に著しい傾向が認められる。まず、国についてみると、(括弧内の数字はその頻度数。以下同じ)

南山經(0)、西山經(2)、北山經(1)、東山經(4)、中山經(7)

つぎに邑は

南山經(0)、西山經(6)、北山經(2)、東山經(2)、中山經(4)

以上のように頻度数に多寡の差はあるが、国と邑は西山経以下すべての山経にあって、南山経にのみ皆無である。これに対し、郡・県の使用例は南山経にのみ4例⁽¹⁹⁾あつて、西山経以下の四つの山経には皆無であるという確率的には考え難いアンバランスが認められるのである。しかも、その郡・県を南山経の次一・二・三の各小篇についてみると、その4例はすべて次二経に集中し、次一・次三経にはない。なお、天下の使用例は

南山經(3)、西山經(4)、北山經(1)、東山經(8)、

であるが、南山経について見ると、それは次三経にのみ集中している。⁽²¹⁾の表参照)このような記載上のアンバラ

ンスは、単純に郡県の文字を後人の加筆ないし書き換えた
か、あるいは單なる偶然の結果であるとはいえないばかり
でなく、個々の小篇の記述者ないしは報告者が、果して同一
の、同時代の人物であつたかどうかすらも疑わせるもの
がある。五藏山経についてすら、このような疑義がないわ
けではない。まして『山海經』そのものが一時期に、特定

の個人の手によって成立したものとは考え難いのである。

つぎに第3の点。複数の篇に亘る重複記事が存在すること
とも『山海經』が一時期に成立したものではないことの証
左とされる。たとえば、海外北經に

務隅ノ山ハ帝顓頊ヲ陽ニ葬リ、九嬪ヲ陰ニ葬ル。一一曰
ク、爰ニ熊・羆・文虎・離朱・鷗久・視肉有リト。

とあるのに對し、ほぼ同文が海内東經にも、

漢水ハ鮒魚ノ山ヨリ出ヅ。帝顓頊ヲ陽ニ葬リ、九嬪ヲ陰
ニ葬ル。四蛇、之ヲ衛ル。

さらに大荒北經にも、

東北海ノ外、大荒ノ中、河水ノ間、附禺ノ山ニ帝顓頊ト
九嬪トヲ葬ル。爰ニ鷗久・文貝・離俞・鸞鳥・皇鳥・大
物・小物有り。青鳥・琅鳥・半鳥・黃鳥・虎・豹・熊・
羆・黃蛇・視肉・璿瑰・瑤碧有り。皆衛于山ヨリ出ヅ。

とあり、しかも、それぞれの務隅山・鮒魚山・附禺山の各
山名は、郝懿行の指摘するように、「皆一山也。古字通用」

と解されるのである。また、

海外北經に

共工ノ臣ヲ相柳氏ト曰ウ。九首ニシテ以テ九山ニ食ウ。
とあるのに對し、大荒北經にも
九土ニ食ウ。

とあり、この相繇は海外北經の相柳のことで、「語声転耳」
という郭璞の注を俟つまでもなく、両記事も同一伝承を誌
したものであることは間違ひなかろう。その他、海外北經
の「柔利ノ国、一一曰ク、留利」と大荒北經の「牛黎ノ国」
も、郝懿行のいう通り「牛黎柔利声相近シ」、蓋し、同一國
名であろう。

このような重複は他にも認められ、特に海外四經と大荒
四經との間に、その重複が顯著であるため、両經は同一系
統の文献ではないかとの指摘も行われていて⁽²²⁾。重複は同
篇目中にも認められる。大荒東經に

大荒ノ中ニ山有リ、名ヅケテ合虛ト曰ウ。日月ノ出ヅル
所、中容ノ国有リ。

とあり、そのあとに再び

大荒ノ中ニ山有リ、名ヅケテ壑明俊疾ト曰ウ。日月ノ出ヅル
所、中容ノ国有リ。

とある。この点について、郝懿行は

中容之國已見上文、諸文重複雜沓躊躇不倫。蓋作者非一人、書成非一家故也。

といつてはいる。同種の伝承の異伝が地域を異にして採録されることが往々にしてあるから、上記のような重複は却つて事実の忠実な記録の結果であると見做すこともできるかも知れない。しかし、こと『山海經』に關する限り、これは事実ではあるまい。これは史景成も強調するように「顕⁽²⁴⁾証其非出一人之手」のみならず、採録者を異にしたテキストを、後世、一本の『山海經』に編成した結果であると解すべきであろう。

つぎに第4の、記事中に時代的矛盾の指摘されることも『山海經』の各篇が一時期の成書でないことを窺わせる。この項は上述の第2で論じたこととも関連するが、五藏山經の末尾に「禹曰云々」の跋文様の付記のあることは既に述べた。そしてこの付記は『山海經』が禹・益の著録であるという古伝の証しとされ、またはこの古伝を眞実とする者によつて作為されたものと考えられる点についても触れた。

しかし、それにも拘らず、海外四經以下の諸篇には、禹自身に関する伝承乃至禹以後の時代に行われたと見做される伝承が相当数認められる。既掲の海外北經の「共工ノ臣ヲ殺ス。」（大荒北經）等、禹の業績乃至その子孫の系譜ばかりではなく、「狄山……帝堯ヲ陽ニ葬ル、……文王皆其ノ所ニ葬ル」（海外南經）、「西周之國、姬姓」（大荒西經）「北齊ノ國、姜姓」（大荒北經）等の周代に關する叙述、さらに「大夏・月支ノ國」（海内東經）「長沙・零陵」（海内經）等、漢代になつて史籍に現われる地名も含まれている。もちろん、これらの記事は後人の加筆部分である可能性も一応考慮すべきであろう。しかし、上述のような諸案件を勘合するならば、その一部に後世の竄入があつたとしても、やはりそれらの該当篇の成立年代そのものが降るものと解するのがより適当と思われる。つまり、五藏山經以下の各經が現行『山海經』に編成されたのが一時期、一人の手によつたのではないとともに、それぞれの經の著録の時期もまた一樣ではなかつたと推定されている。ただし、その著録の年代推定については、その根拠となるべき客観的叙述が少なく、従つて、研究者の見解が極めて多岐に分かれている。

この問題については稿を別にして述べる。

三

以上のように、五藏山經、海外・海内・大荒各四經並び

に海内外の各篇はその体裁が異なり、当初から一冊の書として編述されたものではなく、それぞれの出現に時代差があり、時代を異にするいく度かの加減を経て編述されたことが推想される。しかも、各篇が現行本の形に編録された時代とその篇の著述された時代とは、必しも同一とは限らない可能性も考慮する必要がある。従つて、『山海經』が一時代、一人の作品でないばかりでなく、各篇は異なる時代の、異なる社会的背景をもち、場合によつては、異なる思想系列に属する人々によって著録され、あるいは編成された可能性を考慮すべきであろう。

『山海經』の成立がもし、このような経緯をもつと仮定されるならば、『山海經』の特質の解明は各篇相互の比較の視点を保ちつつも、まず、各篇ごとの性格の研究を進め、その上に立つてはじめて全体の性格を把握することが必要となるであろう。その際、とくに重視すべき点は、時系列的発展的な視点である。劉秀以来の見解を墨守し、著述と編録の歴史性を弁別せず、全篇を一括して『山海經』の性格を論じた近世以前の諸学説は、いうに及ばず、各篇の成立の時代を異にするという歴史的視点を取り入れた近代の研究者の諸説も『山海經』の性格を、ややもすれば、一元的に固定的に把握する傾向がつよい。そのため、『山海經』の本質を論じるに当つて、あるものは地理誌ないし物産誌と

し、あるものは古代神話伝承の書とし、またあるものは古代の旅行指南書、あるいは祭法の書、はては語怪の書や寓言集等々と結論づけているのは、現行本の『山海經』の中で、研究者がもつとも強く印象づけられた要素から導き出した演繹的な解釈であるものが多い。さもなければ、この書に認められるあらゆる主要な要素を網羅し、「古代神話・故事・巫術・地理・博物觀念之一大結集」などとする傾向がつよい。たとえば、呂子方は『山海經』が長期に亘つて形成された書であることを認めながらも、他方でこの書は、

歴史・地理・生物・礦產・医薬・天文・曆法・氣象・占驗・神靈・祀神的儀式和祭品・帝王的世系及葬地・器物的發明制作・以至絕域遐方・南天北地・異聞奇見・都収并録・无所不包。

といふ、結局は、この『山海經』は、

可以说是我国最早的類書

と結論づけているのも、その典型的な一例であろう。⁽²⁷⁾

『山海經』が上述のように、同一人、同一時代の作品でないとするならば、この書の性格すらも歴史的に累層し変化した可能性を前提にして、時系列的な視点に立つて、考究されなければならないであろう。原山海經がいかなるものであつたかは、今日では窺い識る術もないが、とりあえず

ず、山經と海經とに大別し、更に後者を海外四經、海内四經、大荒四經、海内一經に分ち、それぞれについて、その性格・本質を検証する必要がある。そしてその検証に雁行しながら、各經の成立の次序を検討し、それらの成果に立って、この書の性格を歴史的に把握する方法が需められなければならぬのである。このような帰納的、かつ時系列的な研究法により、歴史的に考究することによつて、この書の本質により迫ることができるものと考へる。

註

(1) 王充『論衡』談大篇は「禹之山經」とい、郭璞「山海經序」は「跨世七代歷載三千」とのべ、かつ「夏后之跡」として、禹の著作としている。張華『博物志』も禹作とい、顏之推『顏子家訓』書疑篇も「山海經夏禹及益所記」とする。他方、『列子』湯問篇に既に
禹行而見之、伯益知而名之、夷堅聞而志之。
とあり、趙曄『吳越春秋』に
禹……遂循行四瀆、与益夔共謀、行到名山大沢、召其神而問之山川脈理、金玉所有、鳥獸昆蟲之類及八方之民俗、殊國異域、土地里數、使益疏而記之、故名曰山海經。
とのべていて。

降つて清の畢沅『山海經新校正』の序に
五藏山經三十四篇實是禹書

とし、郝懿行も『山海經箋疏』の叙で、
五藏山經五篇……真為禹書無疑矣。

と述べるなど、『山海經』の注釈者たちは一貫して、この書が禹・益の手に成ることを前提としてきた。

蓋本諸家記録、非一手所成故也。

また降つて顧頽剛は『山海經試探』(『史學論叢』第一冊、北京大学出版社所収)の中で

山經与海經固非一世之書、其書亦各成一体系。(3頁)
とい、史景成も「山海經新証」(『山海經研究論集』中山圖書公司、一九七四年所収)につきのように述べていて。

當為多人多年之成績、復拠重複・矛盾・異説之記載亦証各部各篇材料非一人之手。(8頁)

わが国では、中尾万三が夙に山經と海經の質的相違に注目している(「山海經を読む」(「本草」一〇一二十号所収)。なお、前野直彬「山海經解説」(『全訳漢文大系33 山海經・列仙伝』集英社一九七五年所収)を参照のこと。

(3) 校秘書太常属臣望については後述。ここで三十二篇といつてゐるのは、延べの数字ではないかと、前野直彬はつぎのようにいっている。

「篇」は後世の「卷」に当たると考へて、差し支えない。
……たとえば、第一篇(卷)に当たる部分が三種類あれば、三篇と数えた。だから、校訂の結果、十八篇にまとめ

られたのである。（前掲書28頁）

つまり、三十二巻の中に内容の重複する巻がいくつもあったと解しているらしい。ただし、その確証はない。

これに対し、小川琢治は「臣望所校定凡三十二篇、今定為一

十八篇」の三十二篇と十八篇の相違につき、五藏山經二十六篇（南3、西4、北3、東4、中12）を二篇ごと合せて十三

篇とし、これに海外・海内各四經が（經文の外に相当量の図画があつたと推定して）計十六篇を算えたとし、更に現行海内東經の末尾の水志関係の記載を三篇として、（『隋書』經籍志は『山海經』のつぎに『水經三卷郭璞注』を誌す）併せれば計三十二篇になると臆測した。尚、この水經三篇は後魏の酈道元が注した水經四十巻とは別で、劉秀校定時、これを巻末の海内東經の末尾に加えたものと小川は説いている。

因みに畢沅は臣望校定本の三十二篇の篇目は南3、西4、北3、東4、中12計二十六篇に、海外・海内各四經計八篇を加えた三十四篇の四が譌つて二に成ったと解している。なお、畢沅のこの誤字説を袁珂も支持している。

(4) 『漢書』芸文志に

成帝時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺書于天下、詔光祿大夫劉向校經伝諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍医李柱国校方技。每一書已、向輒条其篇目、撮其旨意、錄而奏之。會向卒、哀帝復使向子侍中奉車都尉歆卒父業。歆于是總群書而奏其七略。

とあるが、十三篇について、袁珂はこの『漢書』の文によつ

て、「史太令尹咸分校而由劉向總校、把五藏山經分為五篇、加海外・海内經八篇共為十三篇的旧校本」と解釈している。（『山海經寫作的時地及篇目考』『神話論文集』上海古籍出版社 一九八二年 24頁。）

(5) 小川琢治「山海經篇目の考証」（『支那歴史地理研究』弘文堂書房、一九二八年 67~116頁）

(6) 高馬三良「山海經原始」（『女子大文学』第一号 大阪女子大学文学会編）34頁。ただし、五藏山經を除くとする同氏の説では、その十三篇が『山海經』と山字を付して呼ばれたかどうかの事由の説明が困難となる。

(7) 顧頡剛はじめ「五藏山經試探」（『史學論叢』第一冊 北京大學潛社 一九三四）において、陸侃如説をほぼ支持し、山經は戰國時代の、海外・海内各四經は『淮南子』成立以後の前漢時代の、そして大荒經以下は劉秀、班固以降の後漢時代の作品であると述べている。（3頁）しかし、顧氏の山海經関係遺稿の整理とその研究の継続をされている張紫農（他に劉起舒・王煦華・尹如濬ら）を一九八三年六月に訪問した際、同氏より、故顧頡剛が五藏山經の成立が他より遅れるという見解をもつていたとの説明を拝聴した。

(8) 袁珂「前掲論文」25頁

(9) 蒙文通「略論『山海經』的寫作時代及其產出地域」（『中華文史論叢』第一輯、一九六二年）

(10) 前野直彬「山海經解説」（『前掲書』）

(14) 陸侃如「山海經考証」(『前掲書』所収)

(11) 畢沅はこの「皆進在外」を「皆進ムルトキ外ニ在リ」と解

し、劉秀が校訂本を献呈する時、大荒東經以下の五篇を後に附して十八篇にしたと解した。郝懿行もこれに雷同する。

(12) この点については異見もある。袁珂は五藏山經と海外經四

篇とは本来一組のテキストで、後者が海外を扱っているのに

対し、前者は国内を取り扱った「海内經」ともいるべき記録で、両者は補完し合う関係にあるものという。従って、袁珂

は海外東經末尾に跋文があり、中山經の末尾には、その証しであるという。(『前掲論文』16~19頁) ただし、もし、

袁説のとおりであるとすれば、中山經の末尾に、なぜ「禹曰

く」の長文の跋語があるかという点についての説明が困難となつてこよう。袁説のように、五藏山經は国内、海外經は國外を対象にしており、地域的には確かに一組を構成するが、

ただし、体裁・内容上では多くの点で不整一であり、袁説には検討の余地があろう。

(13) 『山海經』の名は劉向・秀父子の命名ではないかと、畢沅は

つぎのようについて。

山海經之名未知所始、今按五藏山經、是名山經、漢人往往称之为。海外經已下當為海經、合名山海經。或是向秀所題。

(『山海經新校正』南山經之首の畢注)

中尾万三はこの畢説をおおむね支持し、『山海經』の名は司馬遷以降、班固以前であるうという(『山海經を読む(三)』『本草』)

(15) ただし、『論衡』の別通篇には

禹主治水、益主記異物、海外山表、無遠不至、以所聞見、作山海經。

(16) この水誌的記事について、賀次君は、

把晉人記載河流的水經、附錄在海內東經的後面。

といつてゐる。(『山海經圖与職貢圖的討論』)

(17) 郝懿行は大荒四經の東南西北の篇目の立て方が五藏山經と解している。(『山海經箋疏』大荒東經の注解)

蓋作者分別部居令不雜廁所以自別於古經也。

と解している。(『山海經箋疏』大荒東經の注解)

(18) このように海外・海内四經と大荒四經・海内經の内容に重複や類似点が多く見られるため、郝懿行は

此(大荒東經を指す)下諸篇大抵本之海外内諸經而加以詮釈、文多凌雜漫無統紀。蓋本諸家記録非一手所成故也。(大荒東經冒頭の注釈)

という。また、畢沅は同一の関係について、大荒經以下の叙述が海外・海内四經に比較して、(1)故事内容 (2)神々の系譜についてより詳細である等の点から「大荒經四篇釈海外經、海内經一篇釈海内經」と見做した。(『山海經新校正』)

他方、侯仁之は「海外四經海内四經与大荒四經海内經の比較」において、各篇の具体的比較を推し進め、大荒四經・海内經

は海外四經・海内四經の「別本」であろうとする顧頡剛の仮説〔『尚書研究講義乙種』〕の証明を試みた。（『禹貢半月刊』七卷六・七合期 319 ~ 326頁）

(19) 郝懿行は南山經に郡・県の文字が見えることに注意し、つぎのように述べている。

至於郡縣之名、起自周代、周書作雑篇云為方千里分以百縣、縣有四郡、春秋哀公二年、左伝云克敵者上大夫受縣、下大夫受郡……今攷南次二經云縣……又云郡縣……是又後人所羼也（『山海經箋疏』叙）

なお、畢沅はこの郡縣の文字について

淮南子云夏桀殷紂之盛也、人跡所至舟車所通莫不為郡縣。則郡縣之名夏殷有之、不獨周矣。世俗以此疑經非也（『山海經新校正』南山經次二經 長右之山の注解）

と。その郡縣の扱い方は違うが、両者とも『山海經』を禹・益の作とする立場を共通にし、かつ南山經の次二經にのみ郡縣が集中する事由については、ともに何ら言及していない。

(20) うち1例は次六經の末尾の山神祭祀法を叙述した經文中に見える。

(21) 天下・国・郡・縣・邑字の頻度表

郡縣 4	天下 1	西山經	北山經	東山經	中山經	
	天下 1	天下 1	邑 2	天下 1		
	天下 2	國 1	邑 2	天下 1		
次 二						

(22) 畢沅は大荒四經は海外四經の釈文、海内經は海内四經の釈文ではないかとみている。（『山海經新校正』の注）これに対し、袁珂は逆に大荒四經の釈文が海内四經、海内經の釈文が海内四經であるうといい、その事由として、たとえば、大荒東經の

君主ノ国有り、其ノ人衣冠帶劍ス。
と、海外東經の

天下 3	國 1	邑 2	邑 2	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1
天下 2	國 1	邑 2	邑 2	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1
天下 2	國 1	邑 2	邑 2	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1
天下 2	國 1	邑 2	邑 2	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1	邑 1
次 五	次 六	次 七	次 八	次 九	次 十	次 十一	次 十二	次 十三

君主國、其ノ北ニ在リ。衣冠帶劍ス。獸ヲ食ウ。二大虎ヲ
傍ニ在ラシム。其ノ人讓ルヲ好ミ争ワズ。

に見るようすに、釈文が本文より詳細であるべきであるとい
う。「山海經寫作的時地及篇目考」(『前掲書』13~14頁)た
だし、釈文説は畢沅・袁珂両説のいづれについても、必しも
説得的であるとは考えられない。

(23) 郝懿行『山海經箋疏』叙

(24) 史景成「山海經新証」(『前掲書』所収)

(25) 顏之推・王應麟(困學記聞)・吳公武(斎讀書志)・焦竑(偽
書論)および『四庫提要』等は、海内東經の桂陽・余暨・象
郡や海内經の長沙・零陽などの郡県名を専ら問題にし、それ
らの郡県名の出現が夏禹の時代と大きく抵触することから、
後世の附益、または注文の経文化であると説いている。

(26) 高去尋『山海經的新評価』(『禹貢』第一卷第一期)

(27) 呂子方「讀《山海經》雜記」(中国科学院成都分院・自然弁
証法研究室呂子方遺著整理研究小組整理『中国科學技術史論
文集』下冊、四川人民出版社 一九八四年) 1頁